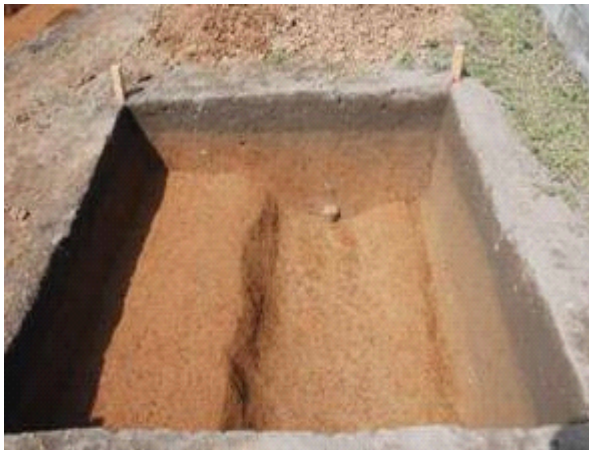
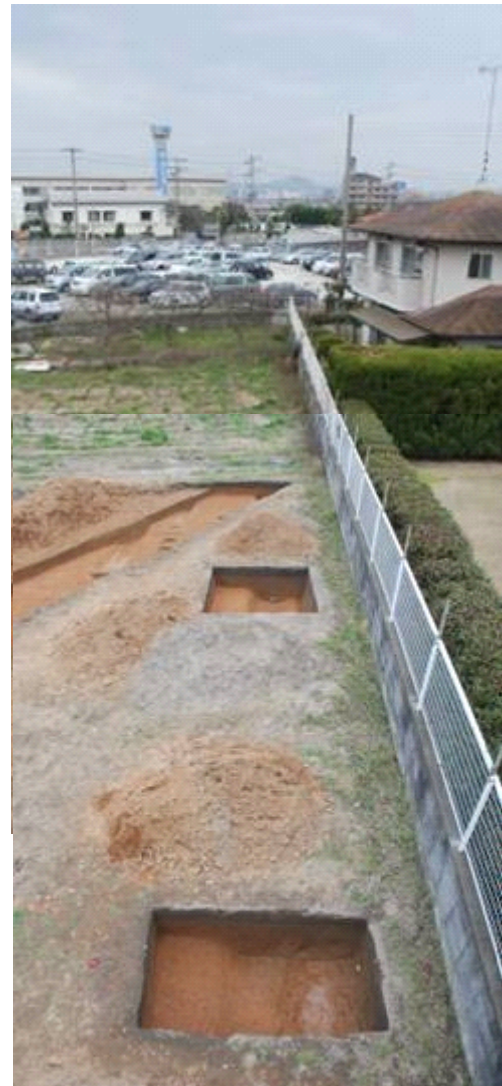


## 「賀古駅家、発掘ものがたり」 9 <古代山陽道の確認>



2 トレンチの溝 (南から)



手前から1・2・3トレンチ  
右手は字境に設置されたフェンス

いよいよ最初の鍬入れ（実際は機械で土の表面を掘りましたが・・・）です。

まずは機械が順番に掘り進めることができるよう、東端のトレンチ（トレンチ：遺跡を部分的に発掘する調査区のこと）から調査を始めました。一度機械で掘り下げると、その上を再び機械で通ることはできません。機械をうまく逃がしながら、調査を進めていく必要があります。うまく「機械をまわす」ことも発掘調査を順調に進めていくコツの一つです。

最初のトレンチは古代山陽道をねらって設定しました（1トレンチ）。調査地の北東側にある、「古大内」の字と「野口」の字の間に「新在家」の字が南東から一定の幅で割り込んでいる箇所です。

古代の道は字と字の境になって残っていることが多いため、発掘は字境をまたぐようにして行う必要があります。しかし、字境は現在もいろいろな建造物の境目や、土地所有

の境界線になっていたり、あるいは現在も道になっていたりして、発掘しづらいことが多いのです。今回の調査区でも字境にはフェンスがあり、隣は工場の敷地となっていました。そこで、フェンスを傷めない範囲で、できるだけ字境ぎりぎりにトレンチを設定しました。

機械で掘削した後、作業員さんが掘削していくと、基盤となる印南野段丘の層が出てきましたが、その上に色の違う土が堆積しているのが確認できました。幅1m以上の溝です。そして、その溝は埋まったのち、少なくとも2度の掘り直しがあることがわかりました。溝の中からは奈良時代の瓦の破片、須恵器とよばれる古代～中世の土器や陶器が見つかりました。

このことから少なくとも古代から中世には字境に沿って溝があったことが明らかとなりました。

しかし、このトレンチだけでは古代山陽道の溝であると確定することはできません。奈良時代の瓦が含まれていたとしても、古い時代の遺物が新しい時代の遺構に紛れ込むことがあります（たとえば今の畑に昔の土器が落ちているように）。

そこで、もう一カ所、少し離れた場所にトレンチ（2トレンチ）を設定し、発掘したところ、同じような溝が見つかりました。この溝はその先に設定した3トレンチの端でも見つかりましたので、少なくとも15mは字境に沿って直線に延びていることがわかります。

印南野台地を延々と直線に延びる字境に沿って古代～中世の溝が確認できました。この溝が古代山陽道の南側の側溝であり、この字境に沿って古代山陽道が通っていた可能性が高くなりました。

古代山陽道は可能な限り一直線にこだわって整備されたことがわかっています。特に明石から高砂では現在に残る地割りから一直線の道路痕跡が良好に認められる地域なので、今回見つかったように単なる「溝」ではありますが、この溝の続きを各地で見つけ、つないでいくことができれば、古代の大土木事業の様子が浮かび上がってくるようになります。

古代の道路探しは1箇所だけでは説得力に欠けます。できるだけたくさん場所で検証し、古代の土木技術と土地開発に迫っていかなければなりません。

兵庫県立考古博物館 学芸員 中村 弘